

## ＜メディアウオッチ＞ 暴力問題の源流に触れる丸山眞男の「無責任の体系」

上出 義樹

社会問題化しているスポーツ界や学校などの体罰・暴力事件について、マスメディアは戦前の源流にまで遡り、根深い日本的体質の核心に迫ってほしいと、2月4日付「メディアウオッチ」で指摘した。

### 示唆に富んだ丸山の日本人論

そのヒントを、20世紀の日本を代表する政治学者の一人、丸山眞男（1914－1996年）の有名な「無責任論」の中に見出すことができる。丸山は「現代政治の思想と行動」（1946年）など、戦後間もなく始めた日本の国家主義研究の中で、天皇も軍人もだれ一人戦争責任を取ろうとしない「無責任の体系」や、横並び体質の問題などを、日本人や日本文化の深層にある「歴史意識の古層」と結びつけて取り上げている。

丸山に対しては、「庶民の視点を欠く」などの批判もあるが、いろいろ示唆に富んだ「無責任の体系」は、日本人論の代表的な研究として知られている。

### 「自立した個人」が存在しない日本

丸山は、日本兵が捕虜に対し行った殴打や残虐行為などを、国家権力、即ち天皇を後ろ盾にした地位的優越性から来るものと分析。国家の行為はすべて正義で、日本兵はどんな暴虐的な振る舞いでも許され、自我や自責の意識を持つことがあまりないと指摘し、民主的な社会では当然のことである「私」の保証、つまり「自立した個人」が日本には存在しないことに言及している。

### 人間の尊厳を軽視した暴力体質は社会全体の問題

今回の柔道界の暴力事件から見られるのも、選手を一人の自立した人間として扱わない日本的な師弟関係であり、暴力に甘い指導者たちの横並び体質である。もちろん、こうした問題はスポーツ界ばかりでなく、人間の尊厳を軽視しがちな「名ばかり民主主義」の日本社会のあちらこちらに根強く残っている。しかし、安倍晋三首相がご執心の戦前復古の「美しい国・日本」に遠慮しているのか、新聞もテレビも戦前の源流にまで遡って、日本的な暴力・いじめ体質をしっかりと掘り下げる報道がほとんどないのが残念だ。

（かみで・よしき） 北海道新聞で東京支社政治経済部、シンガポール特派員、編集委員などを担当。現在フリーランス記者。上智大大学院博士課程（新聞学専攻）在学中。